發育完成期における手術後5年を 経過した患者の局部床義歯の1例

山 田 敏 郎 鈴 木 康 之
本 田 仁 夫 竹 花 一
大 木 一 三

A Case of Partial Denture for a Patient in Fullgrown Age when 5 Years Passed After Operation

Toshiro Yamada, Yasuyuki Suzuki, Kazuo Honda, Hajime Takehana, Kazumi Ōki

I 緒 言

口腔歯列内において、歯牙喪失欠損に対して義歯による補綴を行なうのは、咀嚼機能障碍の恢復、発音機能、顔面の審美障碍の恢復は言うまでもなく、更に顎骨及び口蓋の解剖的欠損の恢復、即ち齒槽部顎骨または口蓋などにおける凹陷、穿孔、交通路の開放、破裂或は囊腫腔などの如き欠損に対し補綴を行ない、口腔として、咀嚼器官として、生理的機能を完全に発揮せしめるにある。

著者は本誌第3巻第1号に、下顎右側の重篤な顎骨炎症のため、右側下顎骨体の縮小した例を報告したが、ここに顎骨の解剖学的欠損の恢復、即ち顎骨發育完了期に、右側下顎部アダマンチノームの手術を施行し、手術5年后、右側下顎に相当する齒槽骨の大部分が欠如し舌下粘膜は頰側部まで移行、齒槽相当部位は舌下粘膜に等しく、手術側関節にも形態異常が認められる下顎に、局部義歯を調製し良結果を得たので1症例として報告する。

II 症 例

患者 24才 男。

既往症 全身的に特記せる既往症なく、5年前、右側下顎骨の隅角部における、アダマンチノームの診断のもとに手術を施行し、患部を離断、寛骨の彎曲部を剔出し、

さきの下顎骨の骨離断部に移植して、手術は好結果を得たので義歯を入れたという。

口腔内所見 上顎前歯部にレジン継続歯、臼歯部には左右に金属冠、インレーが装着されている。下顎においては8～2が欠損、欠損部の齒槽骨に相当するものは大部分消失し、舌下粘膜が頰側部まで移行し、齒槽相当部を指診すると極めて柔軟で、舌下粘膜の感触に等しい。たゞ臼歯部後方には下在骨が存在して、後臼齒三角の形態を保持して居る。

X線所見 右側顎関節の顎頭は中心咬合位においては、やや前進位に偏位しており、開口運動時に顎頭は顎関節窩から前方に脱出する。また右側顎頭の形態は左側に比較して萎縮縮小し非常に細い像が觀察される。

図1 右側

図2 左側

パントモグラフ この装置はX線用フィルムを患者の顔面に一定位に設定し、一定方向よりX線を放射し患者の体を回転して下顎骨全体を一枚のフィルムに納め得る

* 日本大学大学院歯学研究科（指導 桜井鉦教授）

図 3 パントモグラフによる像

装置で、左右側の関節部形態まで現わし得るのである。この装置で写したX線像でも明らかに右側の顎骨切除部の移植骨及び左右側顎関節の状態が比較検討し得る。これによれば左側では顎関節顎頭の形態、位置及び関節窩の状態は正常であるが、右側即ち患側にあつては顎頭は萎縮縮小し、関節窩内側下方に偏在している。

III 義歯の調整

印象採得に当つては舌側部の移動粘膜に対して異常圧迫を避るため、特に柔軟なアルギン酸印券材をもつて1

図 4 ワンピースキャストによる床

図 5 陶歯排列

回に印象を試みた。維持装置としては、鉤及びバーをワンピースキャスト法により、不銹鋼を採用し、左側健常歯に強固な維持を計った。

図 6

図 7 義歯装着

図 8 装着後

IV 総括及び考按

5年後のX線像による右側関節に於ては、顎頭は中心咬合位に於てはやゝ前進位に偏位しており、開口運動時

には顎頭は関節窩から前方に脱出する。また右側顎頭の形態は左側に比較して萎縮縮小し、非常に細い像が観察された。

なお義歯は患側歯槽骨が欠如しているので、不当な力を作用させないためと、粘膜負担を軽減する目的で、維持装置を増加し、歯槽相当部の床を可及的に厚くして豊頬を試み、右側頬側部に於ける従来の憔悴感を一掃して、咀嚼機能の恢復と、顔面の審美障害を、充分なものとはいえない難いが、一応患者に満足を与えることが出来た。

VI 結 論

本症例の右側関節異常は、顎骨一部離断手術の際における、筋肉、血管、神経離断による影響、装着義歯の維持、安定不良による咀嚼能力の減退、ならびに高度の偏側咀嚼を行うため、X線像に顎頭の萎縮及び位置異常を招来したものと思われる。調整後の現在義歯は全く良好で咀嚼、機能共に増大した。